常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ　seasonⅢ

令和　５年　１月 20 日(金)

その１　通算 297 号

◇ 書き初め大会の価値

冷気の残る体育館。３学期の始業式から引き続いて行われるのが、本校の特色ある学校行事「書き初め大会」である。特色と秘訣は、大会の実施方法にある。

素晴らしい姿勢を保ち、お手本のような話の聴き方の児童たち。校歌で締めくくった始業式の緊張感そのままに、児童の気持ちを「書き初め大会」に引き継がせ、さらにモチベーションを高めさせる教師の仕向けも見事だ。

児童に与えられるのは、3m 四方のスペース。この絶妙な児童の距離感がいい。会話は遮(さえぎ)られ、小さな自分の世界を確保できる。座布団を準備するのは、正座で書き初めを行うためのもの。児童専用の小(うなず)ぶりな座布団が学校保有であるのも頷ける。座り方ひとつで心持(こころもち)ちが変わり、所作(しょさ)も変わる。本当に価値深い行事だ。

習字用具を整え、書き初め用の長尺(ちょうじゃく)下敷きに折り目を付けた真新しい四つ切用紙をそっと伸ばす。墨液(ぼくえき)を注いだ硯(すずり)の面で筆の穂先を均(なら)して準備完了。一連の動作を無言で行うから、心まで整う。そこに生まれるのは、「凛(りん)とした空気」だ。

凛とした空気を感じるだけでも価値がある

低学年は硬筆(こうひつ)での書き初め。大会で低学年が後方にいるのは、中・上学年の学びの姿を見せ、空気を肌で感じさせるための配慮。だから低学年も、正座で行う。

私からの話は、【書き初めのポイント】３点を伝達。

❶筆を立てて持つ（※低学年は教室の鉛筆も持ち方を想起）

❷「はね」「とめ」「はらい」を丁寧に

毛筆は「はね」「止め」「はらい」の仕上げが大事。つまり終末の微妙な筆の扱いが重要。これを可能とするのが穂先の利用。筆を立てないとできない技。

❸手本をよく見る

手本を見れば、「ひらがなは漢字よりも小さく」「横線よりも縦線を太く」という小さなこつに気付く。筆を立てないと太さの調整は困難であり、ひらがなの柔らかさは出ない。つまり「筆立て」は、全てに通ずる最大ポイントだ。

柴田先生からの指示で書き初め開始だ。　写真からも真剣さが伝わってくる。

３年生「明るい心」４年生「美しい空」
５年生「強い決意」６年生「深い友情」

全員で記念撮影。大成功の大会閉幕。

「美しい空」の下で育まれた「明るい心」と「深い友情」、そして**新年に向けた「強い決意」**が書の文字から伝わってきた。